

# 「関係機関との連携Ⅰ」グループ

## I 研究の目的

〈平成30年度〉

### 連携G

- (1) 関係機関と児童生徒についての情報を共有するとともに具体的支援方法についても共通して取り組む。
- (2) 具体的支援方法について研修し実践をする。

### 相談支援G

- (1) 本校における関係機関との相談支援、支援会議についての実態を明らかにし、成果と課題を明確にする。
- (2) 相談支援、支援会議の実際の事例から、会議の持ち方について検討し、実践に生かす。

〈令和元年度〉

- (1) 病院等関係する機関での行われている支援内容や方法を知り、本校の児童生徒により望ましい対応を探る。
- (2) 支援会議を開催する際の関係機関、会議の内容を整理し、本校の児童生徒の実態に合った支援会議の在り方について研究することで、本校の児童生徒のよりよい学習環境を整える。

## II 研究の内容

〈平成30年度〉

### 連携G

- (1) D 病院支援学習室と児童生徒についての情報交換を行う。
- (2) D 病院支援学習室と具体的支援方法について探り研修を深める。
- (3) D 病院支援学習室と共通した支援方法を用いながら実践をし、事例研究を行う。
- (4) 実践事例研究会を行う。(問題行動、具体的支援、変容成果を共通理解する)

### 相談支援G

- (1) 本校での関係機関との相談支援、支援会議についてアンケートを取り、実態を明らかにする。
- (2) 相談支援等についての研修を行う。
- (3) 相談支援、支援会議の実際の事例を出し合い、具体的会議内容や進め方について学ぶ。

〈令和元年度〉

- (1) すでに連携している関係機関における支援方法について知り、学校での指導にどのように活かせるかを探る。
- (2) 先行文献研究を行い、本校における関係機関との連携の在り方について、最新の情報から学ぶ。
- (3) 本校の支援会議のデータを基に、目的あるいは対象児童生徒の年齢による連携先の関係機関を整理し、どのような機関があるのか調べ、必要な連携先について探る。
- (4) 支援会議の在り方について、多くの事例について学び合うことから今後の参考にする。  
(一人1実践)

### Ⅲ 研究の方法

〈平成30年度〉

#### 連携G

- (1) D 病院支援学習室との連携
- (2) 共通した具体的支援についての検討及び研修
- (3) 実践事例研究会

#### 相談支援G

- (1) 本校全職員への相談支援、支援会議についてのアンケート配布、回収。
- (2) 外部に出向いての研修会、講師を招いての研修会の実施。
- (3) グループの全職員が1事例の持ち寄り。

〈令和元年度〉

- (1) 本校児童生徒の支援マップ等から連携先を調べ、関係機関の見学や支援内容の共有の方法について事例を通して学ぶ。
- (2) 総合教育センター発行の関係機関連携ハンドブックや、先行論文等を参考に先行研究を行う。
- (3) 近年の本校における支援会議の状況から、生活年齢を一つの基準としながら、連携機関先について整理するとともに、在籍児童生徒の出身市町村の相談機関について、どのような機関があるのか調べ、どのように連携できるのか、話し合う。
- (4) 自分が関わった支援会議についてまとめ、発表し意見交流することで、互いに学ぶ機会を持つ。

### Ⅳ 研究計画

〈平成30年度〉

	月	①連携G 研究内容	②相談支援G 研究内容
1	5/9	グループワーク (実態・問題点・何を取り組むか)	グループワーク (実態・問題点・何を取り組むか)
2	6/25	グループワーク (実態・問題点・何を取り組むか)	グループワーク
3	7/19	グループ分け、主担当、研究内容	主担当、研究内容、計画の確認
4	8/22	中間発表	
5	9/25	共通した具体的支援についての検討及び研修	相談支援・支援会議を行っている中で、改善、明確にした方が良い点についての検討
6	10/18	↓ 実践事例研究会 ↓	アンケート内容の検討、研修会のついて
7	11/16 11/20		研修先、研修内容の検討、アンケート配布時期
8	12/13		事例の様式の検討、研修会の確認
9	1/15	研究集録分担、研究内容のまとめ、課題	アンケートのまとめの検討、事例発表
10	2/20	研究集録分担、研究内容のまとめ	事例発表、研究集録分担、研究内容のまとめ、課題
	3/18	全体研②今年度のまとめと課題	

〈令和元年度〉

	月	研究内容
1	5/15	グループ研究「昨年度の課題から、今年度の研究計画検討」
2	6/13	グループ研究「研究計画決定、先行研究」
3	7/17	グループ研究「本校の支援会議、ケース会議の実際」
4	8/19	グループ研究「自分が関わった支援会議について実践報告①」
5	9/19	グループ研究「自分が関わった支援会議について実践報告②」
6	10/25	グループ研究「本校の通学生における支援会議の持ち方」
7	11/19	グループ研究「D 病院職員との機関連携に関する意見交流」
8	12/11	グループ研究「今年度の研究のまとめ、研究集録の分担について」
9	1/21	グループ研究「今年度の研究のまとめ」
10	2/27	全体研究会

※連携先機関の見学等、随時計画する。

## V 平成30年度の実践

### 連携G

#### (1) D 病院の院内見学研修会

日時：平成30年10月5日（金）

#### (2) 具体的支援方法についての研修

書籍『支援・指導のむずかしい子どもを支える、魔法の言葉』（小栗正幸監修、講談社、2017）を読み合い、協議し合う研修会を行った。

第1章	「話せばわかる」が通じない！
第2章	子どもに伝わる！魔法の言葉
第3章	困った場面でこそ「言葉の力」が重要
第4章	「これから」につながる支援・指導のために
第5章	保護者との対話がうまくいく魔法の言葉

認知に偏りがみられ、支援がむずかしい子どもへの支援・指導は学校だけで行うのではなく、医療、福祉、行政などの関係機関と連携していくことが効果的であり、実際に連携した対応が図られている。子どもへの支援をよりよいものにするためには、関係機関どうしの具体的な支援方法の共通化が求められるが、本研修会はその第一歩となる校内での支援方法のさらなる共通化に役立つものとなった。

学校職員の支援方法の共通化をさらに深めたうえで、他の機関と連携することは、子どもへの質の高い支援の基盤となり、子どもの成長につながるので有意義な取り組みだった。

今後もこのような研修会を校内で進め、あるいは学校と他の機関との合同の研修会を行うなど、取り組みを広げていきたい。

#### (3) 実践事例研究

実践事例研究では、小中高生の心身症的症状をもつ児童生徒の事例について、平成28、29年度に本校校内研究の共通理解グループで作成したフェイスシートと目標検討シートを用いなが

ら小学部・中学部・高等部3つの学部の児童生徒について事例検討会を行った。

3回の事例研究の際、以下の4つの支援方法について、話題に上がっていた。

①気持ちを聞く。

(話したい時にじっくり聴き、認める。イライラすること等、感情を言葉にできるようにする。)

②共感、理解する。

(その時にできていることをほめる。否定的な言葉を使わずに接する。)

③無理なく好きな活動ができるようにする。

(本人が好きな活動をする。授業はゆったり進めて会話を増やし、学習量を減らす。不安になりやすい場所、時間は避ける。)

④見通しを持たせる。

(学校のルール・日程、活動内容を板書や手元で視覚的に提示する。初めて体験すること、場所、内容を詳しく説明する。)

## 相談支援 G

(1) 本校全職員への相談支援、支援会議についてのアンケートを実施

現在、本校の「相談支援・支援会議」について、実施回数、会議参加メンバー、相談内容、成果等を明らかにすることで、今後の会議の計画を立案する際の参考とし、実際の支援に生かすことを目的として実施した。

(2) E 教育委員会への訪問研修会

E 教育委員会に訪問し、施設見学や取組を説明してもらい、今後の関係機関との相談や支援会議等に役立てることを目的として実施。

期日：平成30年12月26日(水) 13:30~15:30

場所：E 教育委員会

①E 役場、関係部署の見学、説明。

②E における子どもを支えるネットワークや機関連携について。

③こども課で主におこなっているもの、他課でおこなっているもの、他機関や団体で行われているものに参加しているものについて、具体的に説明していただく。

④事例について報告。

(3) 相談支援、支援会議の事例の学習会

相談支援または支援会議について、一人1事例について資料を作成した。研究日に説明してもらい、事例提供者に質問をしたり、意見を交流させたりすることで、学び合うことができた。

## VI 令和元年度の実践

### (1) 先行研究

岩手県立総合教育センター発行の「関係機関連携ハンドブック」を活用して、先行研究を行った。

- |  |
|--|
| <p>①関係機関連携について理解</p> <ul style="list-style-type: none"><li>・どんな連携があるのか</li><li>・関係機関との連携のメリット</li><li>・学校(園)における関係機関連携</li></ul> <p>②園・学校全体ですすめる支援</p> <p>③気づき・発見</p> <p>④アセスメント</p> <p>⑤支援レベルに応じた体制</p> <ul style="list-style-type: none"><li>・いつ連携するのか</li></ul> <p>⑥関係機関の選定</p> <ul style="list-style-type: none"><li>・どこと連携するのか</li></ul> <p>⑦関係機関と連携しての支援</p> <ul style="list-style-type: none"><li>・関係機関連携に必要な考え方</li></ul> <p>⑧モニタリング</p> |
|--|

「関係機関連携ハンドブック」は、幼稚園・保育園・小学校・中学校・高等学校の教員向けに作成されたものである。そのため、本校の実態に合わせて活用するには、注意も必要である内容もあるが、参考となる考え方や、関係機関と連携していく際に、教員として押さえておくべき内容も多くあった。

本校で行われている校内支援会議を開くタイミングは各担任の気づきによることが多く、校内支援における気づき・発見の部分など、本校としてのフローチャートのようなものがあるとよいのかもしれないという意見も出されたが、発達段階、児童の背景の多様化が著しく、今回活用したハンドブックのフローチャートを参考に活用していく方向とした。

支援会議には、開催する主たる目的によって、いくつかに分けられることも学んだ。

移行支援会議：支援経過において、主な支援機関が代わる目的で行われる会議。
--------------------------------------

協働支援会議：複数のニーズを有するケースに対して、複数の機関が支援することを目的として行われる会議。
--

コンサルテーション：他機関、多職種への専門的助言を目的として行われる会議。
---------------------------------------

また、本校に在籍している学園生については、支援会議の主体が学園にあり、企画については、学園と調整することになるが、本校に在籍している通学生については、支援会議の主体がはっきりしてないもの、あるいは、通院している病院によっても会議の開催についてばらつきがあることが話題になった。

### (2) 本校で行われている支援会議についての学習会

昨年度相談支援グループが行った一人一実践について、今年度は、8月19日と9月19日の2回にわたり、自分が関わった支援会議について、決められた様式にまとめ、発表、質疑応答した。

昨年度も資料としてまとめたことがある職員は、1回の支援会議の内容ではなく、一人の生徒の経過を追いながら支援会議についてまとめた事例もあり、支援会議は、その時点での支援の在り方を確認したり、その後の支援の方向性について確認し合い、その児童生徒の育ちを支えていく重要な機会である

ことを学び合うことになった。

また、支援会議に参加していない職員については、本校の支援会議がどのように行われてきたかを知るために、記録を整理することを行った。

手順としては、各学部で、支援会議の記録をまとめておくフォルダの記録を参考にしながら、どのような内容で、誰が、どこで行い、次回いつおこなったかについて、平成 29 年度、平成 30 年度、令和元年度(8月まで)に分けて、一覧表にまとめることにした。

資料を整理する前は、かなり膨大な記録を整理することになると思っていたが、実際には、個人ファイルを追ってみても、支援会議のレジュメはあるが、記録がないものが多かった。結局は、記録があり、内容や参加者がはっきりしている会議のみカウントし、その会議がどのような内容があったのかをまとめた。

そのような状況について報告があったことで、支援会議を行ったものの、その記録について、学部で回覧するというスタイルが定着していなかった学部もあるのではないかと、ということが話題にあがり、高等部では、学部会で支援会議の記録についての確認を行った。

一覧表という形で整理した職員からは、卒業生の支援会議の内容は、どのような経緯で在籍期間に関係機関と連携し支援したのかの道筋が見え、途中から支援者として加わった場合には、支援に有益な情報があると感じたとの感想も聞かれた。

### (3) 連携機関先での研修会

#### ①F 子ども家庭総合支援センターの見学 11名参加

目的

- ・社会福祉や心理などの資格を持つ専門の職員が、子どもと家庭に関する様々な悩みや困りごとの相談に応じる子ども家庭総合支援センターの施設を見学し、施設の目的や役割について知る。

期日 令和元年 11 月 19 日 (火) 16 : 00 ~ 17 : 00

内容

16 : 00 ~ 説明と質疑応答

16 : 45 ~ 施設見学と質疑応答

F では、「身近な場所で子どもや保護者に寄り添って継続的な相談・支援を行う、子ども家庭総合支援センターを設置することにより、児童虐待の発生を防止し、児童が心身ともに健全に成長できる家庭支援体制を準備する」ことを設置目的として、平成 30 年 4 月 1 日に子ども家庭総合支援センターを F 保健所に開設した。

昨年度の業務状況に応じ、職員は 3 名増員されたとのことだったが、多岐に渡る業務に多忙な状況が理解できた。しかしながら、本校に在籍する児童生徒において、特に通学生においては、学校以外の連携先として、放課後等児童デイサービスなどに繋がるきっかけとして、F 子ども未来ステーションは利用可能な機関であることがわかった。ケースによってはあるが、F 子ども未来ステーションと連携していくことで、児童生徒が、安全安心な地域生活を送るための一つの資源になると思われる。

#### ②D 病院の見学 10名参加

目的

- ・D 病院内の見学、支援学習室での利用者が支援を受けている状況を参観させていただくことで、

具体的支援方法や本校での学習環境、支援に役立てる。

- ・カンファレンスに参加させていただくことを通して、クライアントについての見立てや、具体的な支援について職種も違い、多様な考え方に触れることで、様々な背景を持つ本校児童生徒への関わり方や、自分自身の指導・支援について振り返る。

期日 令和元年 12 月 11 日（水） 10：00～13：00

内容 10：00 2 班に分かれて院内見学

11：00～ カンファレンス聴講

11：30～ 振り返り

今年度は、利用者がいる状況を見学させていただくことで、本校であれば、どのように学習環境を整えることができるのか(学習内容に必要なものだけに調整する等)を考えることができた。また、小学生の利用者が増加していることが分かり、教育・医療・地域の連携が重要であることに改めて気づかされた。

入院している患者さんについて、医師、看護師、作業療法士、ソーシャルワーカー、相談支援室、等多様種の職員が一堂に会してのカンファレンスを聴講させていただいた。1 時間という限られた時間の中で入院している大勢の患者について情報共有している様子を実際に見学することで、効率の良い進め方、参加者にとって必要な情報を得られる内容、今後必要な支援を誰がどのように行うか等、本校で行われるケース会議でも、参考になる内容であったと感じた職員が多くいた。また、退院に向けて家庭訪問や学校訪問を行い、退院後の生活を見据えた情報共有を行い、今後の生活における課題を予測していることは、病状が回復すれば地域に戻る本校の小・中学部にとって、大変参考になるとともに、学校においてもそうしていきたいと思った職員が複数いた。

カンファレンス後には、2 グループに分かれて、自分がこの研修に参加したことで今後の指導に活かしていきたいことを具体的に順番に発表し、見学して抱いた疑問については病院職員より説明いただき、参加した一人一人の教員にとってより深い学びにつながった。

#### （4）通学生の支援会議の持ち方について

以前に比べて、本校は学園生だけでなく、通学生の在籍数が増えている。その際、医療機関より本校を紹介されて入学、転学してくるケースも多く、支援会議の主体が不明確なケースがある。もともと、学園併設の支援学校ということもあり、支援会議を学校主体で行うケースの蓄積も少なかったため、通学生における支援会議の持ち方がはっきりしていない。そのため、移行を目的とする支援会議ではない、協働あるいは、コンサルテーションを目的とする支援会議について、どのようにあればいいか、「関係機関連携ハンドブック」を参考にしながら話し合った。

そこでは、学校以外の機関（医療機関、行政機関、福祉サービス等）に段階を踏まえてつなげていきたい、そのためにも、校内支援としてケース会議の体制を整えることが必要ではないか、ということが話題になった。特に高等部においては在籍期間が3 年間と限られてくるため、3 年生においては、進路指導部主体での支援会議を実施するが、それ以前の段階においては、主体がはっきりしていない。そのため、ケースによっては、もっと早く支援会議を持つておけば状況が変わったのではないかと思われるケースがあったということが話題になった。

関係機関と連携するうえで、基本は校内でできる支援と外部機関に依頼する支援をしっかりと分けて考えていく必要もあることから、校内支援会議の持ち方や、外部機関と支援会議を企画していく際の主体を明確にする必要があることが確認できた。

## VII 研究のまとめ

### (1) 成果

- ・話し合いや、文献研究のみでなく、関係機関に目的をもって見学に行き最新の情報を得たことで、今後の指導の参考になった。関係機関2カ所の見学を通し、その機関の役割を知ることができ、本校での事例や支援に役立ちそうなことがわかった。
- ・これまで行われてきた支援会議について、情報交換を行い、よりよい支援会議の在り方についてグループ内で検討することで、自分が支援会議に参加する際の参考になった。また自分が関わっている支援会議について事例報告することで、グループ内で様々な意見をもらい、今後の支援会議の持ち方の参考になった。
- ・支援会議のデータをまとめることで、支援会議を開催するとき、参加者や内容の選定に役立った。また、各学部の事例を知ること、発達段階ごとの内容の共通理解ができた。

### (2) 課題

- ・研究で学んだことを本校の児童生徒の支援会議にどう活かすかが今後の課題である。よりよい支援会議の持ち方や、支援会議を行う時期や、誰に参加してもらおうか等、支援会議について、校内の全職員で理解していけるようにしたい。まずは、学園とのケース会議について、学校と学園で項目を共通にした様式で取り組んでみることを提案していく。
- ・支援会議の記録が残っていない事例があった。資料が残らないと、対応が継続されず、児童生徒の指導にとって大きな損失になってしまう。児童生徒のために支援会議の記録の重要性を再度各学部で確認し、会議記録を個人ファイルに保存したかを点検する体制を構築する必要がある。
- ・通学生の支援会議の持ち方について事例についてグループで検討した際、本校の校内体制についてまだ確立されていないことが話題になり、校内支援体制について現状で不十分な部分について検討していく必要があるのではと思われた。
- ・本校の児童生徒は、医療機関につながっているがその他の機関とのつながりは、まだできていない事例も多く、今年度見学した機関以外の外部の関係機関についても基本的な情報共有ができるようにしたい。
- ・支援会議についての事例提案では、対象児童生徒の背景についての説明に時間を要してしまい、整理された観点に沿った分析等、話し合いが深まるには至らなかった。支援会議について事例報告する様式の項目、事例検討の進め方について工夫が必要だった。